

## 母親の語りに見られる文化差

### - 東京と広州の発話内容の比較 -

|          |        |
|----------|--------|
| 日本獣医畜産大学 | 柿沼 美紀  |
| 文京学院大学   | 上村 佳世子 |
| 中山 大学    | 静 進    |
| 中山 大学    | 金 宇    |
| 白百合女子大学  | 黛 雅子   |

日本と中国の母子が共同でつくる語りの内容を比較検討した。語りそのものは言語的要素の強い作業だが、ある刺激（ここでは線画）が提示された時、そこから何を抽出し、どう解釈するかは非言語的な作業でもある。ここでは対立的な人間関係を暗示する線画を用いて、母子がどのようなやりとりを行うかを分析した。語りの内容は、中国が物事の善悪を分かりやすく提示する場として用い、その方法は母親の誘導のもと、子どもが重要な項目について発言するスタイルを用いている。一方東京の母親は登場人物の内面に焦点をあて、複数の可能性が提示して子どもに選択させるというスタイルをとる傾向が示された。これまでに語りのスタイルを日本と米国、日本国内の地域差で比較検討してきた結果（柿沼・上村 2003; 上村・柿沼 2004; Wakabayashi et al 1999）このようなスタイルの違いは、それぞれの生活地域に適應するための人間関係の解釈や対処方略を表しており、母親は適應的なモデル提示し、子どもはその共同行為に参加することでそれを獲得していくものと考えられる。

【キー・ワード】語りのスタイル, 文化差, 共同行為, 日本, 中国

### はじめに

人間が問題解決場面に対面したときの情報の解釈とその対処方略には、個人差があると考えられる。他者の行為を理解予測する際に、状況的文脈に関する複数の情報を読み合わせて解釈したり判断する一方で、読み取られずに捨てられてしまう情報もある。東(2002)によれば、状況判断に必要と考えられる情報の種類は人によって異なり、また情報が欠けている場合には、与えられた情報を時系列的に並べたり意味的に解釈したりしながら、主体がその行為をひとつの物語のなかで位置づけながら判断をおこなっている。この時に、われわれは自分の認知的枠組を基準として、行為や文脈を理解していく。認知的枠組は、個人の生活経験のなかで他者との関わりをとおして構成・再構成され、世界を認識したり問題に直面した際の判断に使用されていくことから、それぞれの生活経験に照らして適應的に形成されていくところに、文化差が生まれると考えられる。

異なる地域における母子の語りのスタイルの違いを比較した研究(例えば, Wakabayashi, Fernald & Kakinuma, 1999; 柿沼, 2001)では、線画を提示して自由に語ってもらおうという手続をとっており、かなり限られた情報から文脈を読みとることになる。母子の語りのスタイルには日本とアメリカ

(Wakabayashi ほか, 1999) , 国内の地域(柿沼, 1999; 柿沼・上村, 2001; 2003; 上村・柿沼, 2004) で、違いが示された。そこには、それぞれの文化的環境に適応する上で必要となる情報が含まれると同時に、こうした母親との共同行為に参加することによって、子どもは語りのスタイルを身につけていくことが予測される。

本研究では、対立的な側面を含む人間関係に関する、日本と中国という地域の発話のスタイルがどのように構成されるか、また、その対立の原因や対処がどのように言及されるかを明らかにすることを目的とした。具体的には、対人的な問題、その原因の帰属および解決のためのルールがどの程度の時間をかけているか頻度で言及されるかを検討した。

## 方 法

**被験者：** 東京、中国広州市の3歳から5歳の子どもと母親、それぞれ20組を対象とした。

**課 題：** Wakabayashi ら(1999)が用いた課題を使用し、柿沼(2001)、柿沼・上村(2001; 2003)と同様の手順で実施した。4枚の絵は子どもの絵本を参考に作成した。そのうちの3枚(図1、図2、図3)について分析をおこなった。課題は東京では自宅、友人宅など子どもが日常的に慣れている場面で実施した。中国では幼稚園の一室で実施した。課題を実施している様子を映像と音声で記録した。中国語の会話はテープ起こしをしたものを日本語に翻訳した。

**言及項目の検討：** 発話を以下の分類でコーディングした。図1『砂浜』については、「ひとりで遊ぶ子」(魚をつくっている、ひとりぼっちでいる、など)、「一人でいることの問題視」、「問題の解決(入れてと言う、一緒に遊ぼうと呼ぶ、など)」、「感情表現」(楽しそう、寂しい、かわいそう、など)、「シャベル」や「お城の旗」という細部への言及の6項目について、それぞれの地域の20組の対象者のうちで言及する比率を調べた。

図2の『泣いている子』については、場面の状況に関して「善悪の判断」を行っているか(友達を泣かせていいのか、など)、「問題に対する対処方法」(なぐさめてあげる、など)、「棒」への言及があるかどうか、「問題場面における教訓」、さらに「感情表現」(悲しい、痛い、など)を使用するかどうかの5項目を検討した。また、誰が絵の中心的な動き(「子どもが泣いている」)に最初に言及したかを検討した。



図1 『砂浜』場面の線画

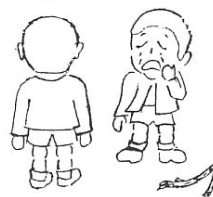


図2 『泣いている子』場面の線画

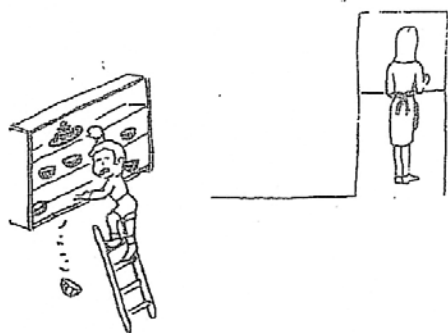


図3 『はしご』場面の線画

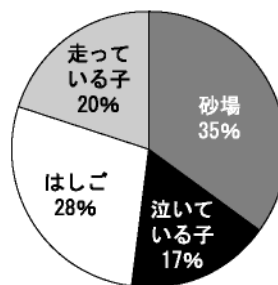


図4 中国：4枚の絵所要時間比率

図3『はしご』については、場面の状況に関して「善の判断」を行っているか(お手伝いをしていた)、「悪の判断」の判断を行っているか(だまって食べようとした)、「複数の解釈」を行っているかについて言及しているかの3項目を比較した。

## 結 果

### 所要時間

課題の平均所要時間は中国が308秒、日本は435秒であった。4枚の絵の比率は、いずれも『砂浜』の絵が一番長く、中国では『泣いている子』、日本では『泣いている子』と『走っている子』であった。中国では『砂浜』と『泣いている子』では所要時間が大きく異なった(図4)、日本ではそれほど大きな差は見られなかった(『砂浜』30.5% 『泣いている子』22.5%)。

### 発話内容

『砂場』 言及率の高かったものに違いが見られた。日本では一人であることを6割の親子が言及し、半数近くが一人であることを問題視している。また、どうすれば一人にいる子どもが仲間になれるか話しをする親子もいた。一方、中国では半数弱が一人にいることに言及しているがそれを問題視

したのは2割で、対処方法についての言及は見られなかった(図5)

中国の場合、もっとも多く言及されたのはシャベルなどの小道具に関する物だった。7割がシャベルやバケツについて言及し、お城の旗についても5割が言及している。日本の場合、絵の詳細部分に関する言及は少なかった(図6)

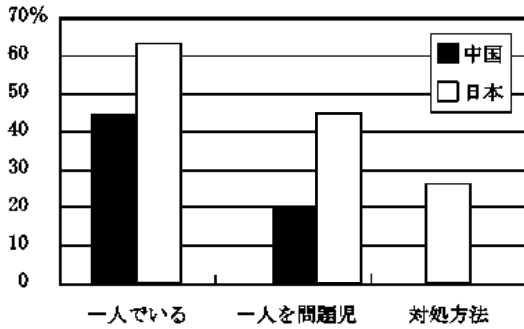


図5 砂浜:子どもが一人であることへの言及

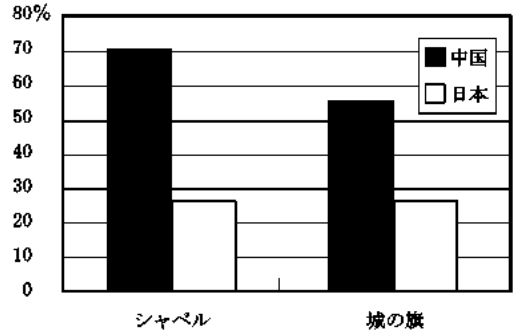


図6 砂浜:詳細への言及

『泣いている子』 母子の会話における役割において違いが見られた。会話の中で、中心的な事項である「泣いている」ことに最初に言及したのは中国では子どもが7割を占めていた。一方日本では子どもと母の比率に大きな違いはみられなかった(図7)

会話の内容に関しても違いが見られた。中国では言及項目数が少ない傾向が見られた。日本では半数が登場人物の「かなしい」などの内面に言及しているが、中国ではその割合は低かった。善悪の判断、今後の対処の方法などについても日本の母親の方が言及する傾向が多かった。(図8)

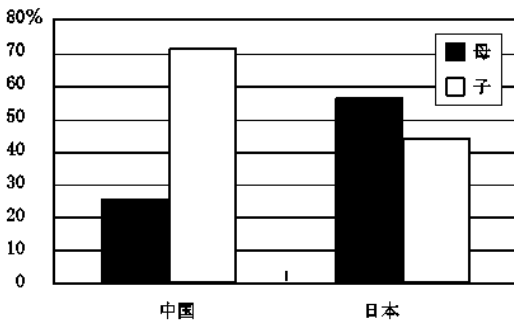


図7 棒:「泣いている」最初に指摘した人

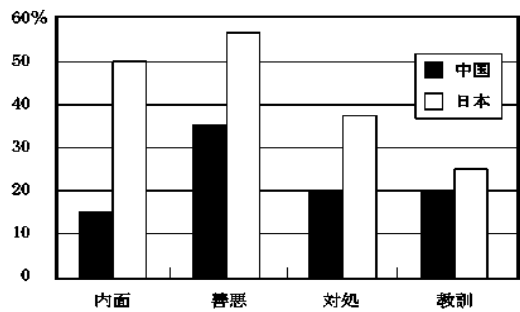


図8 棒:内面への言及

『はしご』 善悪の判断を下す点では日本も中国も同様の傾向が見られた。しかし、その内容には違いが見られた。中国では7割がはしごに登っている子どもが悪いと判断しているが、日本では半数であった。一方で、手伝いをしている茶碗が落ちたといった「善意」の解釈を3割がしており両方の可能性について言及している親子もいた(図9)

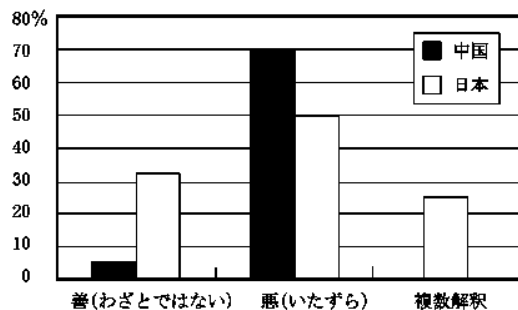


図9 はしご：善悪の解釈

## 考 察

中国と日本において、両者とも語りの場面を通して子どもに社会的状況の解釈方法を提示している様子が見られた。全体的な絵の解釈は両者に共通するものであった。しかし、絵のどの部分に重点を置くかには違いが見られた。また、解釈の提示方法に関しては、中国は単一的な解釈を行う傾向が見られたが、日本では複数の可能性を検討する傾向が見られた。特に登場人物の置かれた状況が問題をはらんでいる場合（子どもが泣いている、ちゃわんが落ちている、など）にその傾向は強かった。

### 絵の構成と発話時間

小道具、登場人物、トラブルのその後、問題解決など複数の要因が重なると発話時間が長くなる。これは中国、日本共に共通していた。『砂浜』の分析から、中国では特に小道具の多さが発話時間を長くしている様子が伺える。日本ではいずれの場面でも登場人物の内面の検討に時間を費やす傾向が見られた。

### 語りの傾向：中国

物事の善悪をはっきりさせて、子どもに人間関係に関するルールを興じる場面として語りを用いている。またシャベルなどの道具、子どもが作っている物などを中心に子どもの活動について具体的に語る。全体的に子どもに話をさせる、あるいは誘導して子どもの口から多くを語らせている。

### 語りの傾向：日本

絵のディテールよりは登場人物の内面やその後の対応など、見えない部分に着目する。また複数の解釈を提示して子どもにいろいろな可能性について考えさせる。また、社会的な場面において、問題を提示し、どのように解決するべきか、そこから得られる教訓は何か、聞き手の子どもはそれをどう思うか等を母子で話し合う。語りの場面を通して人の内面に注目する方法を提示している。

### 非言語的状況の理解としての語り

ここでは実際の発話内容を分析対象としているが、これは同時に親子の置かれた非言語的な側面をとらえている。つまり日常生活の中で子どもが注意すべきもの、検討しなければならない事項を母親は絵の中から抽出し、子どもに提示しているからだ。その抽出内容は中国と日本で異なる部分も見られた。同じ刺激を提示しても、アメリカでは、絵の示す状況と因果関係、さらにそれに関するひとつの解釈を母親が子どもにストーリーとして語り、子どもはそれを聴き母親の質問に応答する形式が示された(Kakinuma & Uemura, 2004)。このような語り参加の形式は、子どもに積極的に語りに参加させようと誘導し、子どもの発話内容を調整していく中国や日本の母親とは異なるものである。しかし、やはりこれらの語り場面を、いずれの母親も対立的要素を含む社会的関係をどのように解釈し、主張・対処すべきかについてのモデルを子どもに提示するひとつの機会として利用していると言える。異なった語りの内容が見られるのは、非言語的な選択が行われているわけで、それはその文化の暗黙の規則に基づいていると考えることができる。子どもはこのような暗黙の規則を周囲の大人との関わりの中で獲得していくと考えられる。今後は子どもの発達段階に応じてどのような提示がなされているのか、また子どもがどのようにその社会の規則を理解していくのかを多角的にとらえる必要がある。

## 引用文献

- 東 洋. (1994). 日本人のしつけと教育・発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会.
- 東 洋. (2002). 社会的判断の国内下位文化による変動の研究：文化間変動因と文化内変動因の交差妥当性の試み. 平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告者, 1-v.
- 柿沼美紀. (2001). 母親の語りに見られる地域差の検討. 母子研究, 21, 56-61.
- 柿沼美紀・上村佳世子. (2001). 母親の語りに見られる地域差—東京と沖縄—. 発達研究, 16, 116-124.
- 柿沼美紀・上村佳世子. (2003). 母親の語りに見られる地域差(3)—東京と沖縄の発話構成, 共同作業としての語りの比較—. 発達研究, 17, 87-96.
- Kakinuma, M., & Uemura, K. (2004). Nonverbal Communications between Mother and Child in Joint Storytelling Interactions IAIR.
- 柿沼美紀・上村佳世子・静進・金宇・黛雅子. (2004). 母子の語り場面に見られる文化差・地域差の検討—中国内モンゴル自治区・広州市・東京・沖縄の比較—. 日本発達心理学会第 15 回大会発表論文集, 504.
- 柿沼美紀・宮下孝広・東洋. (2002). 社会的意思決定に対する理解・態度の発達に関する国内比較研究. 平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告者; 社会的判断の国内下位文化による変動の研究：文化間変動因と文化内変動因の交差妥当性の試み, 19-24.
- 上村佳世子・柿沼美紀. (2004). 母子の語りに見られる地域差—東京と山形の発話構成の比較—. 発達研究, 18.
- Valsiner, J. (1997). Culture and the development of children's action (2nd ed). New York i Wiely.
- Wakabayashi, T., Fernald, A., & Kakinuma, M. (1999). What, how and why?: Japanese and

American mothers' questions in joint storytelling sessions. Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN.

Wertsch, J.V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge: Harvard University Press.

### < 謝 辞 >

本研究の調査にご協力をいただいた保育所の職員の方々はじめ、保護者、園児の皆さんに心より御礼申し上げます。

なお本研究は文部科学省学研究費補助金 基盤研究(B)「行為の理解，推測，評価の認知的枠組としての文化的スクリプト：日・米・中比較研究」(課題番号：14310062；研究代表者：東 洋)および文部科学省学術フロンティア推進事業「LD(学習障害)の国際比較研究 - 非言語性能力・心の理論 課題検査の作成と日中比較」(平成12年度～平成16年度)による助成を得て行われた。

